

October 5, 2023
琉球大学 仲座栄三
enakaza@tec.u-ryukyu.ac.jp

皆様 いかがお過ごしでしょうか？

琉球大学の仲座栄三と申します。

最近海岸メーリングでは、投稿もあまりなく、穏やかな日々が続いています。

騒がせるようで申し訳ないのですが、以下のような議論を投じてみたいと思います。

つい最近、河田恵昭先生より、一冊の本をお送り頂いたのが以下の話のきっかけとなっています。その本は、「津波」（ゴフ／ウッドリー著、千葉敏生訳、河田恵昭解説、みすず書房、312p.、2023年10月2日発行）です。

その中に、「津波」の語源や、「Tsunami」という言葉が英語圏に広まったいきさつなどが紹介されています。その内容に啓発されて、以下に2点の議論の提起とそれに対する私見を紹介したいと思います。

(1) “Tsunami”という言葉は、いかに英語圏に広まったか？

(2) 「津波」の語源は、「津＝港」を襲う「波」としてよいか？

議論と私見については、添付のPDFをご参考ください。

皆様のご議論、ご意見などが投げられることを期待いたします。

議論と私見

(1) “Tsunami”という言葉は、いかに英語圏に広まったか？

前述の本は、

1986年の明治三陸津波による災害の様子が、エリザ・シドモアによって同年にナショナルジオグラフィックマガジン」に掲載された際、「Tsunami」という単語が始めて用いられた。

と説明を与えている。

しかしながら、それでも Tsunami という単語は、英語圏で一般的でなく「Tidal Wave」が一般的であった。英語圏に広まったことについて、1946年4月1日、アリューシャン諸島のウニマク島近くで発生した地震津波によって甚大な被害を被ったハワイ・ヒロの津波災害にあることが、次のように説明されている。

…、その報告の中で、3人の博識な科学者、コックス、マクドナルド、シェパードが『津波』という単語を採用して、その意味を丁寧に説明された。こうして、津波という単語はたちまち西洋の科学者たちに取り入れられ、それ以来、すっかり英語化された。

しかし、当時建てられた慰霊碑には、やはり「Tidal Wave」と刻まれている。

このことに関して、引っかかるのは、なぜに、3人の科学者はこれまでの言葉「Tidal Wave」を用いず、「Tsunami」という日本語を用いるに至ったのかということにあるが、それについては触れられていない。

当時津波に巻き込まれた現地人あるいは英語圏の者は、

「波だ！なんてこった！」「高波だ！」「洪水」…

などと証言している。また、スクリプス海洋研究所の著名な海洋地質学者、F. セーパード氏も Tsunami という認識ではなかったことが触れられている。

そこで、やはり、「なぜ、3人の科学者はこれまでの言葉であったはずの『Tidal Wave』を用いず、「Tsunami」という日本語を用いるに至ったのか、という問に駆られる。

当時、ハワイ・ヒロには、1885年以来日本人の移民の人々が到着していた。そして、1946年に至っては、ヒロの町の低地に「新町」という日本人街が築かれていた。津波は、その街に壊滅的な被害をもたらした。日本では、1937年から1946年まで小学校5年生の国語の教科書に「稲村の火」が載っており、津波防災教育が実施されていた。これは、1854年12月24日発生した安政南海地震津波の教訓を伝えるものである。

1896年に発生した明治三陸津波の際には日本の新聞各紙は「津波」という言葉を使った。このとき、ナショナルジオグラフィックマガジンにおいて英語で初めて Tsunami という言葉が用いられて説明された（本より一部引用）。

1946年ハワイ・ヒロでは、多くの日本人移民達も被災している。日本人移民達は、この出来事を明確に「津波」として説明していたに違いない。また、その説明は日本における津波防災教育や明治三陸津波の教訓などの知識を受けて、かなり説得力を持っていたに違いない。

当時、日本人移民達が、来襲する津波の様子を見て、なんと叫んだのかが知りたところである。このことについて、2012年に1年程ハワイに滞在した際に、ハワイマノア教会にて大変お世話になった藤本菊枝（キクエ）さんのことが思い出された。その方のハワイにおける戦前・戦中・戦後、ハワイ日系人としての記録が、毎日新聞社から出版されている（ハワイ日系人 母の記録「虹の絆」、毛利恒之著、270p.、2000年）。それにヒロの津波について、何らかの記述があるに違いないと調べてみたところ、あった。次のように書かれている。

1946年4月1日、エイプリル・フールのこの日、奇しくも驚くべきことが起きた。実は、この日から、ヒロの海岸ぞいにあるキャンディー工場で、キクエは働くことになっていた。しかし、ハワイ島南西海岸のコナの教会から牧師が来て、交わりの会をひらくというので、キクエは工場に頼んで初出勤を一日遅らせてもらった。

朝食を終えたとき、遠くで、けたたましくサイレンが響きわたった。救急車や警察車の悲鳴のようなサイレンも聞こえる。えたいの知れぬ恐ろしい気配に包まれた。

「なにごとでしょう？」

キクエは急いで外に出てみた。シゲキ（夫）も出た。いつもは静かなヒロ湾の海面が、七色に変わって盛り上がり、波立ち、泡立っている。海が猛り狂ったか。地を揺るがすような不気味な潮騒がとどろき、下町は騒然としている。キクエは、一瞬、なにが起きたのかわからなかった。

「大津波だ！」

シゲキが叫んだ。

...

ヒロの海寄りの中心街は、壊滅的な被害を受けた。北側の海際にあったラオパーホイホイ小学校は、そこにいた生徒たちごと、大津波にのまれて海に消えた。海岸ぞいを走る砂糖きび運搬の軽便鉄道の列車も押し流された。多くの市民が犠牲になった。

キクエが働くことになっていたキャンディー工場は、高波に流されて、従業員が幾人も死んだ。奇しくも、キクエは難を逃れた。

...

津波被災後のヒロは、就職難がつづき、キクエも仕事さがしに苦労した。しかし、少しずつ道がひらけた。

...

やはり、日本人移民達は、その様子をはっきり「津波 (Tsunami)」として説明している。また、教訓や日本で受けた教育によって、津波が地震によるものであることについても異口同音に説明していたであろうことは、想像に難くない。それら説明の説得力の強さを受けて、3人の科学者達は、「Tsunami」という言葉を用いて説明したに違いないという推測に至る。

すなわち、Tsunami という言葉が英語圏に広まったのは、ハワイ・ヒロの津波災害にありかつ、日本人移民達による説明に端を発するものであったと推測される。こうして、Tsunami という言葉を英語圏に広めたのは、津波の専門家ではなくて、日本人移民達であり、それが日本の防災教育「稲村の火」や明治三陸津波の教訓を通じてのものであったと想定される。1946年当時は、まさに終戦直後のことであり、日本国による真珠湾攻撃に対する恨みの喧騒が、日本人による説明であるとする事実や日本語「Japanese」による説明という記述を残すのに躊躇させたのかもしれない。

本の著者らは、「3人の博識な科学者、コックス、マクドナルド、シェパードが『津波』という単語を採用して、その意味を丁寧に説明された」と書いている。しかし、肝心の、なぜ「津波」という言葉を採用するに至ったかについては触れていない。被災時の巷では、すでに日本人移民達によって、そのような現象が地震によるものであり、そしてそれが「津波」と呼ばれているものであり、さらにはそのような防災教育が日本で

は行われているということが、この現象を科学的に理解するのに大いに役立ったと、記されるべきであったように思える。

ゴフ／ウッドリーの本は、次のような説明をも与えている。

英語には「津波」を表す「tidal wave」があるにもかかわらず、「Tsunami」が用いられるのは、上記経緯のほかに、「tidal」は「潮」を意味する言葉であり、津波が満干によって起こる現象ではないためと考えられる。

...

また次のようにも書いている。

欧米のメディアが、(少なくとも科学的な見地からいえば、)信じられないくらい不適切な「高波 (Tidal Wave)」という単語を使いつづけた一方で、西洋と日本の科学者たちは抜かりがなかった。2004 年のインド洋大津波で、世界じゅうのメディアが数々のインタビュー中に科学者たちから語彙の集中レッスンを受けた結果、ジャーナリズムの文体がようやく思い腰を上げた。これに勇気づけられるように、2010 年のチリ地震津波のあと、メディア報道全体の 95 パーセント以上が津波という単語を用いていた。

話し言葉の持つ威力を物語る結果だ。

ここに津波研究者たちの努力の成果が現れている。

ここの結びにある「話し言葉の持つ威力を物語る結果だ」を、1946 年当時、日系移民達がハワイ・ヒロの被災要因について、強い説得力を持って説明していたことであろう情況に当ててみると、様々な喧噪のあるなかで、彼らの説明は、3 人の科学者をして「Tsunami」という言葉で語らしめたのではなかろうか。

(2) 「津波」の語源は、「津＝港」を襲う「波」としてよいか？

上述の本では、そのはじめにおいて、「『津波』という単語は、『津＝港』を襲う『波』とうい意味である」と説明している。語源由来事典では、「津波の『津』には『船着き場』『船の泊まる場所』『港』などの意味があり、港を襲う波で『津波』となった」と説明されている。

このことについて、よく考えてみると、「津＝港」であることは理解できるとしても、「津波」が港を襲う波であるという解釈には、釈然としないものがあるし、あまりにも狭い意味を与えているようにも思える。一方で、「津波は、沖側では小さくとも岸近くで、巨大な波となって襲うものであるから」などとも説明されている。しかし、この説明は、いささか専門家の後付け的な知恵に思える。この説明もやはり私にはしっくりこない。

1771 年に、沖縄の先島地方で発生した大津波 (明和津波) を説明する古文書には、次のように記録されている。

乾隆 36 辛卯 3 月 10 日五つ時分、大地震あり。

右の地震止み、則ち東方なる神（雷）の様轟き、間もなく外干瀬まで潮干し、所々で潮群れ立ち、右の潮一つに打ち合わせ、似ての外、東北・東南に大破、黒雲の様翻かえり立ち、一時に村々へ三度まで打ち揚げ、潮揚がり高さ、或いは 28 丈（約 85m）、或いは 20 丈、・・・或いは 2 丈、3 丈、沖の石、陸へ寄せ揚げ、陸の石や大木（根）なから引き流され、・・・

このように、日本における津波災害の伝説や伝承では、おおかた「港の底が見えるほどに潮が引いた後に、大波が来た」という具合に説明されている。稲村の火でも、

風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見るみる海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れてきた。「大変だ。津波がやって来るに違ひない。」と、五兵衛は思った。

と説明している。この説明文からは、当時、津波は「潮が引いた後に、大波となってやって来る」という認識にあったことを伺い知れる。

ゴフ／ウッドリーの本は、1946 年、ハワイ・ヒロの津波来襲に対して、次のような証言を取り上げている。

まるで浴槽のお湯を抜いたときのように、海水がみるみる引いていった。すると、再び浴槽にお湯を張ったときのように、海水がゆっくりと戻ってきたのだ。…早めに学校へ登校してきた子どもたちが、海水の引く様子を見るなり、地面でじたばたしている魚をつかまえようとしていた。…（このことに関連して、虹の絆のキクエは、「北側の海際にあったラオパーホイホイ小学校は、そこにいた生徒たちごと、大津波にのまれて海に消えた。と説明している」）

…

このような類似した数多くの説明に鑑みると、津波の「津」は「港」という一文字の持つ意味ではなく、「港の底が見えるほどに潮が引き」あるいは「浅瀬の潮が引いて海の底が現れ」等々、「潮が引く」ことを説明する文の文頭の一文字として「津」が現れたのではないかと想像される。

したがって、「津」「波」とは、「港の底が見えるほどに潮が引き」「大波が押し寄せる」こととして説明される。この説明は、津波の持つ著しい特徴の一端をよく表しているが、津波のすべてが「引き」で始まるわけではないことから、誤った解釈を与える恐れもある。しかしながら、津波という現象の特徴をよく表しているのも事実である。

ゴフ／ウッドリーの本は、**教育力**で結んでいる。そこには次のようなことが説明されている。

2004 年のインド洋大津波 … 10 歳のイギリス人生徒のティリー・スミスは、ブーケット北部のマイカオ・ビーチに両親と休暇に来ていた。その少し前、学校の地理の授業で津波について学んでいた彼女は、海が引き始めたとき、津波の前兆だと気づいた。娘から危険を知らされた両親は、リゾートのスタッフと協力してビーチの人々を避難させた。おかげでそこは、タイで津波に襲われたのに犠牲者ひとりも出なかった唯一の海浜リゾートとなった。

教育の力が人命を救ったのである。

…

日本国において、「津波」という言葉が現れた際、津波が「港を襲う波」「浅瀬で顕在化する波」というような説明が付されていた訳ではないように思う。しかし、いつしか、人々は「津波」に対する解釈を、「『津＝港』を襲う『波』という意味」として説明するようになったのではなかろうか。

いまでこそ科学が発達し、津波はかならずしも引きで始まる訳でないことが知られることとなっている。しかし、当時、津波とは「港の底が見えるほどに潮が引き」「大波が押し寄せる」ものとの伝承があったことも事実と言えよう。このような背景から、「津波」という言葉が生まれたものと推測される。

上で挙げた2つの議論について、ご議論、ご意見などが投げられることを期待いたします。

謝辞

本議論の提示に至ったのは、京都大学名誉教授河田恵昭先生、株式会社エコー田中聡氏と私との3人によるまる2日間に亘っての説明や議論を経てのことである。ここに付記し、河田先生、田中氏に感謝の意を表したい。この議論と私見を投じるに当たっては、琉球大学工学部社会基盤デザインコース准教授福田朝生さんに、事前に目を通して頂いた。彼は素晴らしい若手の研究者かつ教育者である。彼を私は「琉大の奇跡」と評している。彼は、「感銘を受けた」「投げられるべきである」と投稿を推薦してくれた。よって、憚ることもなく、この投稿が行われるに至る。ここに、福田氏に感謝の意を表す。

* 上記の「虹の絆」（毎日新聞社）は、若い研究者に家族共々ぜひ読んで頂きたい書として薦めたい。

** 稲村の火は現在国語の教科書から消えているが、そのDNAは生き抜いて、現在、河田先生による「百年後のふるさとを守る」が2011年4月より国語の教科書に採用されている。関連して、河田恵昭自叙伝「災害文化を育てよ、そして大災害に打ち克て」（ミネルヴァ書房）が2022年2月25日発行されている。その内容の壮大さは筆舌に尽くせず、若手研究者にはぜひ読んでいただきたい書として薦めたい。